『 北国街道 西脇往還“善光寺道” 』を歩く

西脇往還は、「洗馬宿」外れ（塩尻宿寄り）の追分で中山道から分岐する。

「郷原宿」から「稲荷山宿」までの九宿で次ぎ、「篠ノ井追分宿(間の宿)」で北国街道に繋がる。多くの善男善女が『遠くとも一度は詣れ』と詠われた名刹・善光寺に向かう祈りの道とのこと。今年は我々も歳男歳女でもあり、地元在住で筑摩県代表のＹ.Ｒ女史・更科／埴科県代表のM.Y氏の御二方にガイド役をお願いして、延べ５日かけ１８里（７０㌔強）の道のりを歩いた。

＊《第１回目：２０１９/3/２７ 日帰り》

中央西線の洗馬駅に１１時に集合。洗馬宿から郷原宿・村井宿・松本宿・更に岡田宿までの２３㌔の強行行程に出発した。洗馬駅から宿場通りに下りて、本陣跡・脇本陣兼問屋跡・荷物貫目改所跡等の説明板を見てから歩き出す。なお貫目改所があるのは中山道では、板橋・追分・洗馬の三宿だけとか。

宿外れの街道下の崖にある「あふた（邂逅）の清水」（＊註１）で顔を洗う。

この先に追分の道標があり、『右 中山道　左 北国往還善光寺道」と刻まれている。左に進むと直ぐに大きな石燈籠の分去れ常夜燈がある。

ここが本来の追分（分去れ）だそうだ。確かに右に細い上りの道が続いていて、先には細川幽斎肘掛の松がチラッと見えた。

地図でみると、郷原宿まではほぼ直線な街道で左下には奈良井川が並行している。

途中の元洗馬地区に下る道の脇の崖下に、「大田の清水」（＊註１）がある。先程の洗馬宿外れでも似た名前の清水で水を汲んできたのだが…

この日は前線通過の影響で風が強く、ここ桔梗ヶ原台地のレタス畑の砂塵がすごく、ようやくの思いで郷原宿に。郷原宿は台地上なので深井戸が多くあり、頼母子講などで共同管理していたそうだ。郷福寺前庭や、大庄屋で本陣とも呼ばれていた山城屋横にも古井戸があった。

郷福寺には芭蕉句碑「野を横に 馬曳きむけよ 郭公」がある。ただこの句は、今別のグループで歩いている奥州街道の鍋掛宿正願寺にも句碑があり、芭蕉翁が「奥の細道」で黒羽から高久に向かう道すがらに、馬子に与えた句と言われている。

山城屋は本棟造りの切妻屋根で破風の上に「雀おどり」(「雀返し」とも）の棟飾り装飾が如何にも豪農の館だ。地元Ｒ子さんお勧めの和菓子屋「雲居鶴」は、下諏訪宿新鶴本店の暖簾分けした職人さんの塩羊羹が有名。この先に明治の道標『右 京いせきそ道　左 東京いなすわ道』(善光寺から歩いて来て)。だいぶ歩いたので街道を横切る「日本アルプスサラダ街道」沿いのコンビニで遅い昼飯。目の前にはアルプスワイン工場。サラダ街道を右手に行けば井筒ワインの工場が、左手に行けば信濃ワインの工場だ。

流石に桔梗ヶ原はぶどうの郷だ。長い郷原宿外れ付近には若山牧水等の歌碑公園や、塩尻短歌館や島木赤彦（広丘小学校校長）下宿先も旧家で立派な本棟造りで「雀おどり」も見事だ。この先は篠ノ井線を渡り国道１９号線歩道を進み、高速道を越えるとようやく村井宿。入口付近の神明宮辺りはかっての口留番所跡とか。この先には向かい合わせで脇本陣兼上問屋の山村家と本陣跡の中村家は冠木門があり、門内には重厚な式台の玄関や中庭が見える。宿出口の桝形の先からはまた国道１９号線に合流。反対側に村井一里塚跡碑・芭蕉句碑があるが交通量多く渡れずじまい。句碑「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き」信濃富士＝有明山を詠んだそうだが？？？

疾走するトラック騒音から逃れ旧道に入ると、右手から天井川が並行してくる。流石に地元のＲ子さんだ「土手の路が良いとの事」二手に分かれて進み、多賀神社で合流して遅いおやつタイムに。

この先の信楽村の中田家は名主・大庄屋で武家役宅と同格の瓦葺きの門と大屋根で、玄関の屋根は唐破風で破風飾りは鶴亀彫刻だ。今日歩いて来た各宿の本陣・脇本陣・問屋等の名家は、明治天皇北國巡幸の際には御小休所になり、その後多くは、特定郵便局になっていた。

この先のカーブ辺りには信楽一里塚跡碑が有った筈だが工事中で見つからない。

豊田橋と城見橋を渡り松本宿に入ってゆく。薄川を栄橋で渡ると博労町で松本城下に入る。この辺りに十王堂跡があるとのこと、Ｍ女史が必死に探したが確認出来ず。橋の手前右手には観音堂は有ったのだが…。

暗渠の袖留橋を渡り深志交差点に到着。時刻は 17：30。ここから岡田宿まで、まだ５㌔も有り、薄暮になりこの先は諦めて今回はここでゴールとして松本駅に向かう。

間の許す範囲で打上げをしてから夫々の手段で帰路に就いた。

（なおＹ．Ｎ氏は、袖留橋ホテル泊りで、明日は一人でこの先の街道を歩くとのこと）

※歩行距離１８㌔／所要時間６Ｈ３０Ｍ

参加メンバー；山浦るみ子(8) 宮下明子(9) 池田有美子(69) 柳澤信義(3) 石井則男(4)
宮澤康元(5) 倉沢直彦(5) 磯村雄二(3)

＊註１；

「洗馬」の地名の由来は平安時代に牧が有ったことや、木曽義仲のもとに馳せ参じた今井兼平が、義仲の馬の脚を清水で洗い癒した由来からと。また義仲と兼平がこの清水で“出会った”のが転化して、「おうた・おおた・あふた」と転化して清水の名前になっていったとか…。

（私事：東海道東下り旅の際、皆さんの後を追いかけ京都三条大橋から大津宿を経て草津宿へ向かう途中、瀬田の唐橋を渡る手前の膳所城下町にあった「義仲寺」と「兼平庵」の墓所に立ち寄ったことが思い出された）